

戦略的芸術文化創造推進事業
5年成果報告書

団体名称	公益財団法人 日本フィルハーモニー交響楽団
担当者連絡先	(担当部署) 音楽の森 (氏名) 小須田 萌 (電話) 03-5378-6311 (アドレス) kosuda@japanphil.or.jp

1. 事業内容

課題	課題 ii 地方や離島・へき地等において、優れた文化芸術活動を鑑賞・参画する機会と社会的価値等を創出する取組
事業名	《契約件名》「東北の夢プロジェクト2022」～文化芸術の力で東北の未来を応援する事業～
事業期間	平成30年5月15日 ～ 令和5年3月31日 ※契約期間を記載
事業内容	※別紙参照 ※事業年ごとの内容を記載。 ※写真等のデータを用い、詳細を記載すること。
URL	※成果報告の内容が分かるページを記載

2. 事業の目標・成果

1	公演数・観客数等定量的な成果について 各年度の実績及び次年度に向けての取組みについて記載。			
初年度における 5年後目標	(単位：)	H30	H31 (R1)	R2
<p>①伝統芸能・バレエ・音楽など多彩なアート分野と協働し、各地域でのネットワーク構築を通じてコミュニティの活性化を推進する。 【1公演につき、2団体程度の地元文化団体が参加】</p> <p>②コンサートホールでの有料公演実施やオーケストラ編成(約80名)での事業を実施することで、幅広い年齢・地域の集客を呼び込み、地域内外の交流につなげる。 【各回70%の集客を目標】</p> <p>③映像等で活動の発信を行うことで「芸術文化による地域コミュニティへの貢献」のモデルケースを広く社会に示し、その活用を促す。 【年1回以上の活動報告会を実施】</p>	<p>単年度目標</p>	<p>1. アウトリーチ：7回開催(参加者約350名) 2. クリニック：2回開催(参加者約50名) 3. ワークショップ：2回開催(参加者約50名) 4. ホールコンサート：3回開催(参加者 約1850名)</p>	<p>1. 盛岡市内での室内楽2回(来場者計60名) 2. 大船渡市内での楽器体験1回(来場者20名)、室内楽1回(来場者30名) 3. 宮古市でのクリニック1回(参加者30名) 室内楽2回(来場者50名) 4. 宮古高校での楽器クリニック1回(参加者30名) 5. 盛岡市内での大規模コンサート1回(来場者1000, うち有料入場500) 6. 事業報告会(来場者50名)にて調査研究報告</p>	<p>1. 本事業に多くの方が関心を持ち、来場する公演への一般来場者数 目標:2,000名 沿岸等からのバスツアーによる来場者 目標:400名 メディアへの露出 目標:4紙誌局 2. 参加した出演者たちに前向きな変化が起こる 目標:参加者の50%に影響 3. 出演団体の関係者に前向きな影響がある 目標:参加者の50%に影響 4. 来場者に沿岸部の地域や活動に関心を持ってもらう 目標:参加者の50%に影響 5. 県外・市外から本事業に来場する(目標:100名)</p>
	<p>実績</p>	<p>・石巻市：5月23日～5月25日 室内楽を計4か所実施(参加者：合計310名)</p> <p>・三春・双葉地区：10月2日～10月4日 室内楽を計4か所実施(参加者：570名)</p> <p>・大船渡市：8月9日～8月10日 ワークショップ(18名)、クリニック(16名)、コンサート(220名)を実施 ワークショップの参加者、地元伝統芸能を受け継ぐ小学生18名とコンサートで共演。</p> <p>・宮古市：9月28日～9月29日 クリニック(17名)、ワークショップ(13名)、ミニコンサート(23名)を実施。</p> <p>・南相馬市：10月6日～10月8日 クリニック(40名)、演奏指導(40名)、コンサート(592名)を実施</p>	<p>【委託対象事業】 1. 大規模コンサート 公演名：東北『夢』プロジェクト2019 会場：岩手県民会館大ホール(岩手県盛岡市) 日程：令和元年8月11日(日) 対象：盛岡市内外、岩手県外など 1200名 備考：バスツアーを実施(参加者：大船渡10名、宮古24名)</p> <p>2. 事業報告会 日時：令和2年2月22日(土) 会場：慶應義塾大学三田キャンパス G-Lab</p> <p>【委託対象外事業】 1. 盛岡市内での室内楽2回(来場者計60名) 2. 岩手県大船渡市での楽器体験とコンサート 3. 宮古市でのクリニック1回(参加者30名) 室内楽2回(来場者50名) 4. 宮古市での高校生を対象としたクリニック1回(参加者30名)</p>	<p>◆予定していた事業 1. 岩手県プレ事業【中止】 (楽器クリニックとミニコンサート、現地の伝統芸能団体と交流) 2. 福島県プレ事業【中止】 (現地合唱団へのクリニックとミニコンサート、現地の合唱団体と交流) 3. オーケストラ公演【中止】 (岩手、福島各地でのオーケストラ公演と地元の子どもたちと共演) 4. 10年目の訪問事業【中止】(宮城県石巻市でのアウトリーチ)</p> <p>◇実施した事業 【委託対象事業】 ・調査研究 ・報告会兼シンポジウム ・被災地訪問10年目冊子制作</p> <p>【委託対象外事業】 1. オーケストラと高校生のオンライン対話イベント(参加者：65名)</p> <p>2. 1日だけの夏休みコンサート feat. 東北の夢プロジェクト 日程：2020年8月23日(日) ①11時開演 ②14時30分開演 (来場者数 ①219名 ②203名)</p> <p>3. 福島県三春町・富岡町にて室内楽コンサート 対象：三春町内小学校6校の4年生、富岡小三春校150名程 富岡第一、第二小学校、富岡第一、第二中学校の児童・生徒と、富岡町民</p> <p>4. オーケストラと高校生の対話イベント (参加者：宮古高校吹奏楽部員17名)</p>
<p>各年度における実績を元に、次年度に向けての課題や取組み</p>	<p>(単位：)</p>	<p>H31年度に向けて…</p> <p>H30年度は11地域で意欲的な事業を行うとともに、事業についての調査研究を行い、シンポジウムを通じてその結果や被災地活動の現状、音楽が社会に果たす新たな役割についても広く発信した。</p> <p>次年度は大船渡市内のイベントでは楽器に触れる機会の少ない子供たちにクラシック音楽への興味を持ってもらうために、弦楽器の体験会を開催する。 大規模コンサートでは本格的なオーケストラ作品、バレエに加えて大船渡の伝統芸能、宮古の吹奏楽部が登場し、幅広いジャンルの音楽を楽しむことのできるものとする。 大規模コンサートへの被災地からの招待者については送迎バスを手配することで、高齢者でも安心して参加できる環境を作る。これらを実施することでより多くの方が事業に参加するきっかけ作りを行う。</p>	<p>R2年度以降に向けて…</p> <p>これまで沿岸部で実施してきたこの活動では、その効果や影響が、地域内に限定されてしまうことが一つの課題となっていた。2019年度に実施した東北の夢プロジェクトでは、異なるジャンルの出会いの場を創出することができた。</p> <p>令和2年度は、岩手県に加えて福島県にプロジェクトを拡大し、新たな取り組みが東北地方からの新たな文化発信と交流の特別な場となり、全国から人が集まる大きなプロジェクトとして育てていきたい。</p>	<p>R3年度以降に向けて…</p> <p>令和2年度は残念ながら新型コロナウイルスの影響により計画していた2県での活動がいずれも中止となってしまったが、沿岸各地の子どもたちとの遠隔での対話イベントや、彼らの活動を首都圏のコンサートで紹介するという事で相互の関係性を維持した。 特に高校生との対話イベントは相互に得るものが多く、好評を博したため今後もオンライン及びリアルで、各地で実施したい。 また、被災地訪問10年目冊子制作に取り組み、多角的に事業を振りかえるきっかけとなった。今後、制作した冊子を活用し広く被災地の現状を周知していきたい。</p>
	<p>単年度目標</p>	<p>1. 本事業に多くの方が関心を持ち、来場する公演への一般来場者数…目標:1,400名 協力・協賛の企業/団体の獲得…目標:8団体 メディアへの露出…目標:4紙誌局 2. 参加した出演者たちに前向きな変化が起こる 目標:参加者の50%に影響 3. 出演団体の関係者に前向きな影響がある 目標:参加者の50%に影響 4. 来場者に沿岸部の地域や活動に関心を持ってもらう (目標:参加者の50%に影響) 5. 地域外から本事業に来場する(目標:50名)</p>	<p>・岩手県、福島県の2か所でフルオーケストラによる公演を開催。県内外で幅広く広報(テレビCM、新聞、教育委員会等)し、本格的なクラシックコンサートの鑑賞機会をつくる。 【集客目標：岩手1200人/福島1000人】</p> <p>・各県内の文化芸術団体を2団体ずつ(計4団体)ゲストに招く。多様な聴衆が集まる場作りを行う。 【来場者のきっかけ：地元団体40%、クラシック60%】</p> <p>・上記ゲストのうち各1団体を沿岸部(被災地)から選定し、被災地域の文化芸術活動の活性化を促進する。 【沿岸部からのゲスト：各県1団体以上】</p> <p>・趣旨に賛同するスポンサー企業を獲得。 【目標：300万円×2社】</p>	<p>達成率</p>
	<p>実績</p>	<p>内陸部でオーケストラ公演1回(参加・来場者1300人) 訪問は2地域</p> <p>【委託対象事業】 1. 東北の夢プロジェクト2021 in 岩手 日程：7月22日(木・祝)午後2時30分開演 会場：岩手県民会館大ホール 出演：永峰大輔(指揮)、江原陽子(司会)、スターダンサーズバレエ団 ゲスト：宮古高校吹奏楽部、陸前高田市立気仙小学校 気仙町けんか七太太鼓 参加・来場者数：1300名</p> <p>2. 福島公演【中止】</p> <p>3. 事業報告会(配信形式で実施) 収録日：3月30日 配信日：3月31日</p> <p>【委託対象外事業】 1. 南相馬オンラインクリニック(参加者数：37名) 2. 岩手県胆沢でのオーケストラ公演 3. 宮古への訪問事業(参加者数：136名) 4. 三春でのオーケストラ公演、学校鑑賞</p>	<p>【委託対象事業】 1. 東北の夢プロジェクト2022 楽しいオーケストラin岩手 日程：8月12日(金)15:00開演 会場：岩手県民会館 大ホール(来場者数：1042名) 主催：文化庁、(公財)日本フィルハーモニー交響楽団 共催：岩手県、岩手日報社、IBC岩手放送、(一社)岩手県芸術文化協会 後援：復興庁、(公財)岩手県文化振興事業団、岩手県教育委員会 特別協賛：全国保証協 協賛：柳屋銀行、岩手県合唱連盟、(一社)こどものための音環境デザイン、杉並区</p> <p>2. 東北の夢プロジェクト2022 楽しいオーケストラin福島 日程：1月8日(日)18:00開演 会場：けんしん郡山文化センター(来場者数：500名) 主催：文化庁、(公財)日本フィルハーモニー交響楽団 共催：福島民報社、福島県教育委員会 後援：復興庁、福島県、郡山市、郡山市教育委員会、南相馬市教育委員会 特別協賛：全国保証協 協力：福島テレビ、(一社)こどものための音環境デザイン、杉並区</p> <p>【委託対象外事業】 1. 「被災地に音楽を」in石巻日程：6月21日(火)～23日(木) (参加者数：288名) 2. 「被災地に音楽を」in南相馬 日程：10月7日(金)～9日(日)(参加者数：32名) 3. オーケストラ・キャラバンin宮古 日程：10月12日(水)18:30開演 会場：宮古市民文化会館大ホール 4. 田村市立要田小学校(福島県)閉校記念公演 日程：3月7日(火)11:15～12:15 対象：要田小学校児童31名、教職員14名、保護者・地域住民約50名</p>	<p>①地元文化団体が参加：100%</p> <p>②各回70%の集客を目標： 岩手公演 70%/福島公演 40%</p> <p>③年1回以上の活動報告会を実施：100%</p>
<p>各年度における実績を元に、次年度に向けての課題や取組み</p>		<p>R4年度に向けて…</p> <p>各地で復興計画が最終段階に入る一方で、震災後、急速に進む沿岸部の人口減少、少子化と高齢化がその深刻度を増し、福島県の沿岸部には原発事故による影響が今も大きな課題となっており残っている。被災地の状況やニーズに合わせて柔軟に行なってきた日本フィルの活動は、被災者への慰問から現地の文化活動支援へと移り変わり、今は「文化による地域コミュニティ支援」のモデルケースとなるべく、各地の自治体やコミュニティとより深く連携し、地域内外の多くの人を巻き込む活動にしていきたいと考える。そして被災地の抱える課題が風化しないよう、引き続き現地の状況を広く知らせ、関心を持ってもらえるよう努める。</p>	<p>R5年度以降に向けて…</p> <p>2023年度も引き続き岩手県盛岡市、福島県郡山市での開催を計画している。また、沿岸の被災地に寄り添う「被災地に音楽を」の活動も、引き続き行う。併せて文化庁オーケストラ・キャラバン事業を活用し、宮城県石巻市と岩手県奥州市でのオーケストラ公演を計画している。</p>	

<p>2 <課題解決>における成果について 「課題 ii 地方や離島・へき地等において、優れた文化芸術活動を鑑賞・参画する機会と社会的価値等を創出する取組」について、各年度において課題解決するための取組目標及び事業実施による成果・変化、次年度に向けての取組を記載。</p>			
初年度における5年後目標と現状	H30	H31 (R1)	R2
<p>①震災の影響のみならず過疎や高齢化の問題、原発事故の影響など様々な課題を抱える東北のコミュニティに質の高い音楽を届ける事業を行う。</p> <p>②伝統芸能団体や他のアート分野とも連携・共働することにより、ネットワークの構築を通じてコミュニティの活性化を促し、文化・経済・教育活動等の促進を図る。</p>	<p>単年度目標</p> <p>1. 津波被害地域への取組 コミュニティの軸となる場所へのアウトリーチを開催し、その前後に来場者・出演者の交流会を行うことにより、コミュニティ内外の対話と交流が促進されるように努める。</p> <p>2. 原発の影響を受ける地域への取組 コミュニティの活性化のため、地元の音楽団体（原ノ町第一中学校）との連携により住民に優れた音楽を届け、またコンサートを軸にネットワークが深まるよう演奏家・来場者の交流の機会を持つ。</p> <p>3. 鑑賞機会の少ない地域への取組 地元教育委員会との連携によって地元の文化資源を活用したワークショップを行うことにより、児童たちに芸術や文化全般に関心を持ちながら優れた音楽に触れてもらう工夫する。</p>	<p>1. 復興住宅での高齢者の孤立問題への取組 対策として、盛岡市内での大規模コンサートに被災地域の高齢者などを招く。これにより高齢者が地域の文化活動に触れるきっかけを作り、コミュニティへの復帰を促すとともに、地域の文化活動への理解者・協力者を増やし、活動の活性化を図る。</p> <p>2. 鑑賞機会の少ない地域への取組 クラシック音楽に触れる機会の少ない大船渡市では子供への楽器体験イベントを通じて、音楽を身近に感じてもらう機会を創る。吹奏楽が盛んな宮古市では子供たちの音楽活動支援のための楽器クリニックを行う。</p>	<p>1. 鑑賞機会の少ない地域への取組 岩手県、福島県の二県には常設のオーケストラ団体が存在せず、またプロのバレエ団もない。本事業では各県で上質なオーケストラの演奏、オーケストラを伴うバレエの実演に安価に触れる希少な機会を提供する。併せて沿岸部等の子どもたちが優れた文化芸術活動を披露する機会を創出する。</p> <p>2. 地域コミュニティの活性化、地域間交流の促進 沿岸部と内陸部の子どもから高齢者までが、新しい芸術体験を核として関係性を結び場を作り出す。</p> <p>3. 地域全体の文化的、経済的な振興 地元の団体が核となって東北地方から新たな文化的価値の発信を行うことで、地域外からの集客を図る。</p>
	<p>実績</p> <p>被災地でのコミュニティ活性化を目指し、地元の文化団体との連携・参画によって事業の効果と影響範囲の広がりを意識し、5つの地域で各地のニーズに応じた事業を実施しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> 津波被害地域での事業：宮城県石巻市でのコラボレーション・アウトリーチ 原発影響地域での事業：福島県南相馬市での楽器指導・コラボレーション・コンサート 原発影響地域での事業：福島県三春町・葛尾村・富岡町でのアウトリーチ 文化芸術に触れる機会に恵まれない地域での事業：岩手県大船渡市での音楽ワークショップとコラボレーション・コンサート 文化芸術に触れる機会に恵まれない地域での事業：岩手県宮古市での楽器クリニック、音楽ワークショップ、コンサート 	<p>【対象事業】</p> <p>1. 岩手県盛岡市で、沿岸部の児童生徒と共演した大規模コンサート実施。バスツアーも企画。</p> <p>【対象外事業】</p> <p>1. 岩手県大船渡市での楽器体験会とコンサート、盛岡市でのコンサートを実施</p> <p>2. 岩手県宮古市で地域の高校生を対象とした楽器指導を実施</p> <p>3. 宮城県石巻市で交流を契機としたコンサートを実施</p> <p>4. 福島県三春町・葛尾村・富岡町で参加型コンサートを実施</p> <p>5. 福島県南相馬市で楽器指導、共演、コンサートを実施</p> <p>6. 福島県川内村で、音楽ワークショップとコンサートを実施</p> <p>7. 宮城県山元町で、地域文化資源となるチェンバロ発掘プロジェクト、コンサートを実施</p>	<p>◆予定していた事業</p> <p>1. 岩手県プレ事業【中止】 (楽器クリニックとミニコンサート、現地の伝統芸能団体と交流)</p> <p>2. 福島県プレ事業【中止】 (現地合唱団へのクリニックとミニコンサート、現地の合唱団体と交流)</p> <p>3. オーケストラ公演【中止】 (岩手、福島各地でのオーケストラ公演と地元の子どもたちと共演)</p> <p>4. 10年目の訪問事業【中止】(宮城県石巻市でのアウトリーチ)</p> <p>◇実施した事業</p> <p>【委託対象事業】</p> <ul style="list-style-type: none"> 調査研究 報告会兼シンポジウム 被災地訪問10年目冊子制作 <p>【委託対象外事業】</p> <p>1. オーケストラと高校生のオンライン対話イベント</p> <p>2. 1日だけの夏休みコンサート feat. 東北の夢プロジェクト 映像ゲスト：岩手県立宮古高校吹奏楽部 大船渡市立大船渡北小学校伝統芸能部赤澤鏡剣舞 南相馬市立原町第一中学校吹奏楽部</p> <p>3. 福島県三春町・富岡町にて室内楽コンサート</p> <p>4. オーケストラと高校生の対話イベント</p>
各年度における実績を元に、次年度に向けての課題や取組み	H31年度に向けて…	R2年度に向けて…	R4年度に向けて…
	R3	R4	達成率
<p>単年度目標</p> <p>1. 鑑賞機会の少ない地域への取組 本格的で間口の広いオーケストラ公演を安価に触れる希少な機会を提供する。</p> <p>2. 地域コミュニティの活性化、地域間交流の促進 県内でも知られていない沿岸部等の子どもたちが優れた文化芸術活動を披露する機会を創出する。これにより、沿岸部と内陸部の人々が新しい芸術体験の共有を通じて新たな関係性を結び場を作り出す。</p> <p>3. 文化面、経済面での地域振興 全国でもまれにみる新たな文化プログラムを東北地方から発信することで、地域外からも集客をはかる。</p>	<p>1. 地域間の交流、多様な聴衆の交錯する新しい文化創造・交流・発信の場づくり プロのオーケストラ団体の存在しない岩手県・福島県の主要都市でオーケストラ公演を開催し、そこに沿岸部及び内陸部から地域の伝統芸能や学校での文化活動に取り組み子どもたちをゲストに招く。各出演団体とは訪問事業・オンライン等を通じて事前・事後に交流を行い、事業の効果を高めるとともに継続的な関係性構築を目指す。</p> <p>2. 独居高齢者の社会参加のきっかけづくり 各沿岸自治体の独居高齢者等を対象に、本公演の鑑賞イベントを実施する。</p>	<p>【委託対象事業】</p> <p>1. 東北の夢プロジェクト2022 楽しいオーケストラ in 岩手 日程：8月12日（金）15:00開演 会場：岩手県民会館 大ホール ゲストコーナー：黒沢尻北小学校合唱部／山田境田虎舞保存会</p> <p>2. 東北の夢プロジェクト2022 楽しいオーケストラ in 福島 日程：1月8日（日）18:00開演 会場：けんしん郡山文化センター ゲストコーナー：郡山合唱塾／南相馬市立原町第一中学校</p>	90%
各年度における実績を元に、次年度に向けての課題や取組み	R4年度に向けて…	R5年度以降に向けて…	(達成率の根拠)
<p>2年間にわたるコロナ禍の影響は、東北地方各地にも深刻な影響を与えています。首都圏と異なり人の移動が少ない東北地方の沿岸地域では、より一層コロナに対する強い警戒感が残っており、その結果益々内外の交流の機会が敬遠される傾向にあります。また、日本フィルとしてもこれまで継続している沿岸部への訪問は当該年度では1回にとどまりました。また、芸術活動を行う個人・団体が常駐していない地域では、コロナ禍で極端に文化芸術活動が疎になっている状況もあらわになってきました。さらに地域コミュニティや学校が担ってきた文化的な伝統も、活動の停滞により活力が奪われ、その継続が困難になっていくことが予想されます。こうした状況を打開するためにも、「東北の夢プロジェクト」を通じて各地の子どもの活動やそれを支える人々・地域を応援していきます。</p>	<p>震災から12年が経過し、人々の記憶が薄まりつつある今こそ、より多くの方と力を合わせて東北地方の復興を後押しし、同時に各地の現状を広く伝えていくことも、私たちの使命だと考えている。岩手県では岩手日報社、福島県では福島民報社にご協力を頂いているほか、次年度からは岩手県と共に実行委員会を組んでの開催を計画しており、このプロジェクトが自治体を含む地域主導のイベントとなるよう連携・協力依頼を進めている。今後はより多くの方にご協力を頂き、活動の継続性を高めていきたい。</p>	<p>当初の目標に加え、震災から10年を経て、少子高齢化、過疎化による経済・文化活動の停滞など新たな課題を汲み取り、被災地のコミュニティ活性化をはかるために、各地に伝わる伝統芸能や、学校で育てられている文化活動に取り組み子どもたちを核としたコンサートを開催し、事業を媒介とした地域内外の交流促進と、活動発信の新たな場を創出することができた。</p>	

3 戦略的芸術文化創造推進事業における課題解決の他に、事業を実施する中で見えた成果について	
(1) 成果内容	(2) 今後、成果を生かせる事業や取組
<p>本事業を通じて調査研究を継続的に行うことにより、被災地の各地域における地域課題の抽出と・整理を進めることができた。また、毎年度事業報告会と報告書を作成する過程において、事業内容の定期的な見直し・修正を行うことができた。シンポジウム等で事業報告会を行うことにより、情報発信の強化ができた。そして事業内容を発展させてきたことで、各地の自治体等からの理解・協力が進み、今後の事業展開の礎とすることができた。</p>	<p>「東北の夢プロジェクト」では、地域独自の文化をオーケストラが紹介するという新しい形の事業を実施することができ、今後も活用可能なモデルを構築することができた。また、個別に交流事業を行うことで事業をより良いものにする工夫も、活用可能であると考えている。シンポジウムを通じて有識者に意見を聴けたこと、現地の方々の声を広く紹介することが重要であることも今後に活かせる知見となった。</p>

4 新型コロナウイルス感染症による影響と取組について			
(1) 影響	(2) 中止・延期をせず、事業実施するための努力	(3) コロナ拡大の影響を通して得たもの、知見	(4) 今後、同様の感染症拡大が起こったことを見据えた取組
<p>2020年度及び2021年度の本委託事業の活動は新型コロナウイルスにより大きな影響を受けて、公演の中止や延期、縮小を止むなくされた。</p> <p>2020年度：計画された3事業のうち全て中止 2021年度：計画された2事業のうち1事業中止</p>	<p>代替イベントとしてオンラインや、映像を活用した事業を実施することで東北各地との関係を保ち続けた。2019年8月には早くも沿岸部の3か所でライブビューイングをいち早く実施するなど、コロナ禍に対応した新しい事業の可能性に挑むことができた。感染症対策については過去2年間に楽団関係者からの発症は皆無であり、また楽団のイベントが感染経路となったこともなく、万全の対応ができていると考えている。</p>	<p>まずは対面でのイベントの価値を再認識するきっかけとなった。また、東北地方の沿岸部など地域間移動が制限されると、文化活動が失われ、地域間の根源的な文化格差問題がより露呈された。</p> <p>そうした中でもオンライン技術を使った取り組みにより、新しいコミュニケーションの方法を模索し、可能性に挑むことができた。</p>	<p>今後も同様にやむを得ない事業中止の場合でも現地との連携により代替事業を柔軟に行っていく。また、実施が可能な場合でも、感染症拡大の状況によっては事前に出演者への検査を実施するなど、安全性と現地の心理に配慮した形での事業実施を心掛ける。</p> <p>オンライン技術を活用し遠隔での楽器指導や対話型のイベントを行うことでコミュニケーションの機会を創出する。2) オーケストラ・コンサートが困難な場合は、①開催時期の変更も検討のうえ、小編成に規模を縮小し実施する方向で各所と調整する。また、②予定する会場にて無観客で収録し、配信（リアルタイムまたは後日）する。</p>
5 1～4 以外に、貴団体において周知したいこと 等			
感想・評判	<p>初めて採択を受けた2017年から今日までの6年間は、東日本大震災から10年という節目をまたぐ転換期にあり、さらにはコロナ禍という難しい課題に直面した時期であった。こうした時期に東北地方での活動を継続・発展させてこれたのは、本事業に採択され、社会的な使命を帯びて活動できたことが大きな意味を持った。昨年7月の第16回後藤新平賞受賞についても本事業の果たした役割は大きいと考えている。</p> <p>「東北の夢プロジェクト」は今後、民間支援の獲得や自治体からの支援、その他助成金なども活用しながら継続し、地域主導による新たな東北地方の文化レガシーを構築することで、東北地方の更なる復興を後押ししていきたいと考えている。</p>		

平成30年度日本フィル「被災地に音楽を」事業実施報告

事業名	被災地に音楽を in 石巻	会場	①川の上 百俵館 ②雄勝ローズガーデンファクトリー ③あとりえDada ④こーぷのお家石巻
時期	平成30年5月23日(水)～5月25日(金) 5月23日①19時～20時 5月24日②13時～14時 ③19時～20時 5月25日④13時30分～14時30分	対象	周辺地域の方々 ①二俣小学校6年生児童6名参加 来場者数:80名強 ②来場者数:約50名 ③吹奏楽部生徒、モダン・ダンス を習う中高生と共演(計12名) 来場者数:約100名 ④来場者数:約80名
事業型	アウトリーチ		
出演	佐藤駿一郎／武田桃子(ヴァイオリン)中川裕美子(ヴィオラ) 大澤哲弥(チェロ) 照沼夢輝(クラリネット)		
経緯	宮城県石巻市は政令指定都市である仙台市に次ぐ県内第2の人口である。牡鹿半島から市内中心部まで広い範囲にわたって東日本大震災による甚大な津波の被害に見舞われた。日本フィルは2011年6月以来、5度石巻に音楽を届けてきた。避難所から仮設住宅へ、仮設住宅から復興住宅への移転が進みハード面での一定の安定を得られる一方、それぞれの段階で築かれてきた人と人の繋がり、コミュニティがばらばらになってしまう現状があり、生活する環境において未来に向けた選択を迫られてきた。こうした中、地域の小中学生と共演することを通じて地域に元気を届けたいと願い、子どもたちとの共演や参加要素のある内容を念頭に置いてプログラムを構成することとなった。		
目的	① 子どもたちと共演によって特別な体験をしてもらい、子どもを通じた支援によって地域を励ます ② 仮設住宅から復興住宅への移転に伴い離ればなれとなった方の再会と交流の機会をつくる		
構成	4つの全公演とも会場到着後、楽員、スタッフは受入先の担当者による話を聞いた上で、来場者の客層を想定し、あらかじめ複数用意していた曲から選ぶプロセスを経た。また、百俵館では大川小学校からの受入先である二俣小学校6年生5名による詩の朗読、あとりえDadaではモダン・ダンスを習う中高生との共演を行った。 下記は共通プログラムを除いた各会場での特有のプログラムである。 ①百俵館:川の上地域の「春」や「自然」をテーマにした詩を小学6年生5名が創作し、朗読。続けてすぐにヴィヴァルディの〈春〉を弦楽四重奏で演奏した。 ②雄勝ローズファクトリーガーデン…「被災地に音楽を」の事業では初めてであり、野外での演奏を行った。終演後には楽団員、スタッフと来場者、会場職員とお茶会。 ③あとりえDada…クラリネットの生徒1名とクラリネット楽団員とデュオ。フルートの生徒1名と弦楽四重奏で共演。モダン・ダンスの中高生10名と弦楽四重奏で「冷静と情熱のあいだ」を共演。 ④こーぷのお家石巻…地元の民謡を弦楽四重奏に編曲、歌謡曲も取り入れた。		

<p>成 果</p>	<p>2018年度「被災地に音楽を」の最初の事業であり、「地域コミュニティを元気にする」ことを目的に開催。各受入先に何か地域の子どもたちと一緒に何かできないかと相談した上で、共通する曲目とそれぞれオリジナルのプログラムを入れることとなった。また、ご高齢の方にも楽しんでいただくような希望を伺った。</p> <p>始めから受入先のニーズを聞き検討を重ねながらプログラムを作ったことで、先方のより具体的な希望をかなえるコンサートの実現に繋がった(①百俵館の詩の朗読、②あとリエDadaのモダン・ダンスや地元吹奏楽部生徒との共演、③雄勝ローズガーデンでは野外での演奏、終演後に全員でお茶会、④こ〜ぷのお家では地元の民謡を編曲して演奏)。</p> <p>日本フィルの「被災地に音楽を」の活動には地元受入先とを繋いでいただくコーディネーターの方の役割が非常に大きく、地域と繋いでくださるからこそ安心して受入れてくれ、こちらも伺うことができる。どの会場も非常によい雰囲気で行うことができたのは、公演当日だけではなく準備段階からコミュニケーションをどれだけ取ることができるか、その対話自体が交流なのだと気付くことができた。</p> <p>今回、楽団員が現地に到着してからコーディネーターから震災時の被害、現状や課題を聞き、リハーサル前に最終的にプログラムを決定していくプロセスを経た。先方の希望を受け入れつつ、柔軟に対応することができたのが地元の方の満足度に繋がったと考えられる。地域の子どもたちにどのような経験をしてもらうか、各地域の抱える課題に丁寧に向き合いながら今後も寄り添っていきたい。</p>
<p>分 析 と 課 題</p>	<p>震災から7年が経ち仮設住宅から復興住宅への移転が進み、移転によってそれまでに生まれた繋がりが中断せざるを得ない状況が続き、新たなコミュニティ構築が迫られている。今後、移転先、移転元のそれぞれコミュニティをどう構築していくか課題は多い。こうした現状のなか未来に向けて動き出し、またその地で励んでいる方々に引き続き心を寄せていきたい。被災地での活動は、演奏技術のみでなく人間力のような総合的なコミュニケーション力が問われる場面に遭遇することがある。地域が抱える背景を理解した上で、こうした課題に寄り添う音楽家の育成が必要である。</p>

平成30年度日本フィル「被災地に音楽を」事業実施報告

事業名	被災地に音楽を in 大船渡 ばばば！オーケストラ 赤澤鎧剣舞と出会う 音で楽しむ動物たち	会場	大船渡市民文化会館 リアスホール(大ホール)
時期	平成30年8月9日(木)～8月10日(金) ①ワークショップ:8月 9日10時～16時 ②クリニック :8月 9日18時～20時 ③コンサート :8月10日19時～20時	対象	①大船渡北小学校(赤澤鎧剣舞)児童16名 ②大船渡高校吹奏楽部生徒 大船渡東高校吹奏楽部生徒 (フルート5名、 クラリネット7名、打楽器4名) ③来場客 250名程
事業型	ワークショップ+コンサート共演		
出演	中村萌子(司会・歌) 伊藤慧&漆間有紀(ピアノ・デュオ) 齋藤政和/佐藤駿一郎(ヴァイオリン) 中川裕美子(ヴィオラ) 大澤哲弥(チェロ) 宮坂典幸(コントラバス) 泉 真由(フルート) 前田優紀(クラリネット) 福島喜裕/濱仲陽香(打楽器)		
経緯	<p>岩手県大船渡市は津波の被害が甚大な地域で、水産施設を中心に大きな打撃を受けた。市内はBRT(バス高速輸送システム)が走り、BRT大船渡線では気仙沼から大船渡の一駅先の盛駅までを繋ぐ市民の重要な公共交通機関となっている。2017年4月には大船渡駅を中心に30を超える飲食店やお店が集まる商業・交流エリア、キャッセンがオープンし、買い物の中心地となっている。また2018年6月には大船渡市防災観光交流センターが開設。大船渡の沿岸部は今なお工事が続いており、津波の爪痕が残るなか復興が進められている。</p> <p>大船渡には三陸沿岸の特徴であるリアス式海岸を象徴する建築のリアスホールがあり、震災直後は全国からボランティアが集まり音楽、演劇など多くの団体が出入りした。日本フィルもこれまで4度、ホールや仮設住宅を訪れてきた中で、今回は三陸沿岸を中心に活動する舞踊の国際フェスティバル「三陸国際芸術祭」プレイベントの連携事業として実施。江戸時代から大船渡に伝わる伝統芸能「赤澤鎧剣舞」を受け継ぐ子どもたちとの音楽ワークショップ、地元高校生を対象としたクリニック、そしてサン＝サーンス《動物の謝肉祭》参加型コンサートを行うなど内容を一層充実させて開催することとなった。</p>		
目的	ワークショップ型のコンサートを実施。伝統芸能についての内容を織り込みながら、自分たちの郷土芸能の魅力を再発見してもらう。		
構成	<p>8月9日</p> <p>① ワークショップ…マイケル・スペンサーにより、サン＝サーンス「死の舞踏」をテーマとした音楽ワークショップ。</p> <p>1)導入 2)リズムを探そうーグループワーク1 誰もが知っている「タンタカ」というリズムを打つ。まねをする。胸から、楽器へと移行する。 3)グループワーク2 4)発表</p> <p>② 楽器クリニック…大船渡市内の高校の吹奏楽生徒を中心に、フルート、クラリネット、打楽器パートのクリニックを実施。</p> <p>8月10日 動物の謝肉祭コンサート</p> <p>1)マイケル・スペンサーによるワークショップの様子をスクリーンで発表 2)サン＝サーンス<死の舞踏>を演奏 3)オーケストラの前で大船渡市無形民俗芸能第一号である赤澤鎧剣舞を小学生が演舞 4)サン＝サーンス<動物の謝肉祭>演奏 5)みんなで歌おう「となりのトトロ」</p>		

<p>成 果</p>	<p>ワークショップとコンサートという本来は目的の方向性が異なるものを、今回初めて一つの事業の中で開催した。初日のワークショップでは外国人のヴァイオリンを持ったマイクさんに最初は恐る恐るの子どもたち。ワークショップではこれから何をやるのかなるべく言葉での説明は行わないやり方に戸惑う様子も見られたが、時間をかけて進め、ファシリテーターからシンプルな質問を投げかけられるなかで、少しずつ自分のアイデアを表現するようになっていった。</p> <p>また、コンサートの冒頭で前日のワークショップの内容をマイケル・スペンサーによる紹介後、江戸時代から続く大船渡市の無形民俗芸能第一号の「赤澤鎧剣舞」を、地域の小学生が踊り、コンサートホールという舞台上で披露した。伝統芸能は後継者問題が課題に挙がることが多く、赤澤鎧剣舞も例外ではない。赤澤鎧剣舞の担い手である子どもたちは、自ら習得を希望する児童生徒で構成されており熱心に稽古に取り組んでいるが、進学や就職をきっかけに故郷を離れることが多いという。そのような中、子どもたちの澆刺とした姿やワークショップの時には想像もつかないような非常に堂々とした踊りに、お客様から暖かい声をいただき、プレイベントではなくコンサートの中で地元の伝統芸能を取り上げたことに意義があったと考えている。ワークショップ、そしてコンサートを通じて子どもたちにとって東北の伝統芸能×クラシック音楽という異文化理解の一助となったのではないだろうか。</p> <p>また8年に渡る「被災地に音楽を」事業の中では大きな協業として、三陸沿岸を中心とする舞踊の国際フェスティバル「三陸国際芸術祭」プレイベントの連携事業として実施した。開演前、ホワイエでは同芸術祭招聘のインドネシアのマスク・ダンスを披露。異国情緒溢れる外国の伝統芸能に多くの人が集まり、クラシック音楽×伝統芸能の新しいコンサートの幕開けを後押しすることとなった。</p>
<p>分 析 と 課 題</p>	<p>このように、新たな協力者と連携しその土地の伝統芸能団体に出演いただく試みによって、伝統芸能とクラシック音楽のコラボレーションという新たな活路を見出すことができた。来場者からは好評の声が多かった一方で、集客には苦戦することとなり、我々が1000席規模の大ホールでコンサートを行うことの意義、内容の再検討を迫られていると感じることとなった。</p> <p>こうした中、地域の声によると大船渡では弦楽器の教室がなく、弦楽器を習う子どもは盛岡まで行かざるを得ない文化的状況であるという。地域のニーズ、課題をより具体的に掴み、段階に応じたプログラムを実施していくことが不可欠であることから、来年度にはヴァイオリン体験会を行い楽器やクラシック音楽に触れる機会を創出する。地元の状況を理解し深めていく姿勢で、丁寧にその声を聞いて寄り添っていくことが東京の一オーケストラ団体がこの地域においてできる次なるステップであると考えている。</p>

平成30年度日本フィル「被災地に音楽を」事業実施報告

事業名	被災地に音楽を in 宮古	会場	①宮古市民文化会館 ②③崎山貝塚縄文の森ミュージアム
時期	平成30年9月28日(金)～9月29日(土) ①クリニック :9月28日18時～20時30分 ②ワークショップ:9月29日10時～16時30分 ③コンサート:9月29日17時～17時30分	対象	①「ジュニア・アンサンブルみやこ」とサポートメンバー (参加者数:17名) ②市内小学校の吹奏楽部等に所属する子どもたち(参加者数:13名) ③地域住民(来場者数:約23名)
事業型	ワークショップ		
出演	マイケル・スペンサー(ワークショップデザイン)富樫多紀(通訳) 佐藤駿一郎/竹歳夏鈴(ヴァイオリン)中川裕美子(ヴィオラ)大澤哲弥(チェロ) 伊藤慧(ピアノ)		
経緯	<p>岩手県東北部に位置し、東日本大震災では大きな津波被害を受けた宮古市。古くから岩手県東部の海上交通の要衝として栄えてきた地域で、かつては「みやこ」の名に相応しく文化芸能を尊ぶ文化がある。東北で最初のオーケストラが宮古のアマチュア楽団だったとされることもうなずける。そして定期的にプロの弦楽器奏者が出るという風土でもあった。現在、その文化は薄れつつあるが、宮古出身の指導者の尽力により、アマチュア弦楽団体と、ジュニアアンサンブルが活動している。また一時期は小・中・高校の吹奏楽部が全国レベルに達しており現在もその伝統は一部の学校で受け継がれている。</p> <p>震災後、当地域の教育委員会の熱心な働きかけもあり日本フィルはたびたび音楽による支援活動を行ってきた。特に平成29年度は教育委員会の全面協力(共催)により、市内ほぼすべての小学校の低学年を対象とした音楽鑑賞教室を開催し、その関係性をさらに強めた。</p> <p>平成30年はこれまで支援していなかった弦楽アンサンブルの指導と、有志の子供たちを対象に地元の新しい施設「崎山貝塚縄文の森ミュージアム」を舞台に、展示内容と関連のある音楽ワークショップとミニコンサートを開催することとした。</p>		
目的	<p>①未来を担う子供たちのジュニア・アンサンブルの指導を通じて、音楽のすばらしさと奥深さに触れ、今後の人生の糧にしてもらう。また彼らの活動の支援を通じて地域コミュニティの活性化を応援する。</p> <p>②地域の新しい施設を活用し、音楽ワークショップにより音楽へのより深い理解と、相互コミュニケーションの向上を目指す。</p> <p>③地域の住民を対象にしたコンサートを開催し、住民間の交流や文化芸術に触れる機会とする。</p>		
構成	<p>①ジュニア・アンサンブル宮古の指導 日本フィルの弦楽器奏者がジュニア・アンサンブル宮古に基礎的な技術、アンサンブル、表現についての指導を行い、最後に弦楽四重奏の演奏を行う。</p> <p>②マイケル・スペンサーがサン＝サーンス作曲「死の舞踏」を題材にデザインしたワークショップ。5名の演奏家たちが音楽づくりのファシリテーターを務めた。その内容は以下の通り。 1)アイスブレイクーアフリカの遊び歌と手遊び 全ての参加者がはじめにアフリカの歌を口伝えで覚えていきます。それを覚えたころに今度は二人組の手遊びがそれに加わります。二人組が今度は4人組になり、つぎつぎに組み合わせさせて最終的には全参加者・ファシリテーターにスタッフも加わり24人が輪になって一つの表現を行う。</p> <p>2)グループワーク1ー誰もが知っているリズムを探す 今回のワークショップでは「音による意味の伝達」が重要な意味を持つ。二つのグループに分かれた参加者たちはファシリテーターと対話し、日常生活の中で慣れ親しんだリズムについて考え、探していく。</p> <p>3)グループワーク2ー「死の舞踏」主要主題のリズム・メロディ・ハーモニーを使った創作 死の舞踏の主要な主題が持っているリズムを共有し、あらかじめ指定された音階、和音を使って参加者が自由に音楽を組み立て、演奏の質をあげていく。ファシリテーターは参加者のアイデアを引き出すために質問を投げかけ、時にはアドバイスし、時には距離を取りつつ、参加者が自律的に協働することを目指していく。</p> <p>4)シェアリングとリフレクション それぞれが作った作品を発表し、お互いに聴きあう(シェアリング)と、その感想や気づいたことを投げかけあう(リフレクション)。</p>		

	<p>5)「死の舞踏」の解説とアンサンブルによる演奏 最後のパートではマイケル・スペンサーが自作の画像や動画を交えて、この作品に登場する音のモチーフとその意味するところを解説。ここでは自分たちが創作した音楽と実際の作品との共通点に気づき、作曲家の視点で作品を捉えるプロセスを作り出す。最後に、5名の室内楽によってこの作品を演奏する。</p> <p>③コンサートでは地域の住民やワークショップ、楽器指導の参加者が集まり、日本フィルのメンバーによる演奏を行った。終演後、来場者と出演者の間にささやかな交流の時間が生まれた。</p>
<p>成 果</p>	<p>被災地での事業のソフトの一つとしても取り組んできているワークショップ。この形式の良さは、参加者の音楽への自主的な取り組みを促し、参加者同士の関係性の向上にも役立つ点にある。これまでも南相馬市や石巻市で学校向けのワークショップを行い、音楽の新たな可能性を示すことができた。</p> <p>ワークショップのそれぞれのプロセスはマイケル・スペンサーと日本フィルの長い協働の中で培われてきたノウハウに基づいている。極力言葉による指示をせず何を目指しているかを感じてもらうこと、そして指示よりも質問することで自ら考えてもらうことを重要視している。</p> <p>アイスブレイクとよばれる導入部分では言葉による説明を行うことなく音楽を使ったコミュニケーションが成立し、参加者の心理的なバリアが取り除かれる。そしてグループに別れて創作・演奏・習熟を行うことで参加者の意識が弾くことと聞くことを行き来し、音楽で最も重要な「聞く力」が養われていく。自発的な創作と相互の聴きあいを経て、研ぎ澄まされたイメージと聴覚でプロフェッショナルの演奏を聴くことで、参加者はこれまでにない「主体的な聞き手」として音楽に関わることができる。そして音楽を通じた人と人との繋がりを実感する。</p> <p>今回は宮古市の吹奏楽部と弦楽器を対象にワークショップを行い、音楽への更なる深い関心と理解、そして参加者同士の協働を導き出すことができた。</p>
<p>分 析 と 課 題</p>	<p>人の背後には地域コミュニティがあり、その背後には歴史や伝統がある。音楽による支援に熱心に応じてくれる教育委員会の背景には、この地域が脈々と受け継いできた文化芸能、ことに音楽への理解と情熱があることを今回、再発見することができた。</p> <p>我々にできることの一つは、こうした文化的な鉱脈を見つけ出し、そこを様々な方法で刺激していくことにより、地域コミュニティにさらなる活力を与えることであると考えている。その方法の一つとして、長期的な視野で地域の文化活動を支援しながら、その活動を地域内外に紹介することで、活動への理解者・支援者を増やしていく。関わるすべての人の生活の質を向上させることが、文化や芸術の本来的な機能と言ってもよいだろう。このプロセスは芸術団体が自らのために行っている活動と相似している。</p> <p>他方、地域の文化的鉱脈を探すことは長い時間とコミュニケーションを要する。何より現地との信頼関係が必須であり、その構築には寄り添い、ともに悩み、行動する実績が欠かせない。</p>

平成30年度日本フィル「被災地に音楽を」事業実施報告

事業名	被災地に音楽を in 三春・葛尾・富岡	会場	①富岡町学びの森 野外堂 ②御木沢小学校 体育館 ③葛尾村小中学校 体育館 ④三春交流館「まほら」
時期	平成30年10月2日(火)～10月4日(木) 10月2日 ①15時～16時 10月3日 ②10時30分～11時30分 ③14時30分～15時30分 10月4日 ④10時30分～11時30分	対象	①富岡町第一小、第一中の生徒17名を含む地域の方約50名 ②葛尾村立葛尾小中学校 小、中学生17名程、職員、地域の方 ③御木沢小児童80名程、富岡小学校三春分校の児童15名程、富岡から災害公営住宅にお住まいの地域の方 ④三春町内の小学生 380名
事業型	アウトリーチ		
出演	九鬼明子／豊田早織(ヴァイオリン) 高橋智史(ヴィオラ) 山田智樹(チェロ)		
経緯	<p>福島県三春町は東日本大震災後、富岡町、浪江町、葛尾村、大熊町などから避難者を受け入れてきた。町内には富岡小中学校の三春分校ができ、15名程の児童生徒が在籍する(2018年10月時点)。富岡町の一部は福島第一原発から20km圏内、葛尾村の一部は30km圏内の避難指示区域であったが、2018年4月にそれぞれ小中学校が再開した。</p> <p>日本フィルは三春町に2011年6月から4回訪れている。三春交流館「まほら」は音響のよい室内楽の専用ホールであり、音楽鑑賞教室として毎回町内の小学生に音楽を届けてきた。</p> <p>避難指示解除となった葛尾村に2017年11月葛尾村民会館、そして三春町内にできたばかりの恵下越復興住宅を訪問。葛尾、富岡の両校が再開したことから、今回は小中学校で開催することとなった。震災前、富岡町では弦楽、管楽器のアンサンブルが盛んだったという。</p> <p>三春町立岩江小学校の遠藤校長先生が町内の学校と日本フィルを繋ぐコーディネーターとなり、三春町内の小学生に芸術に触れる機会を作っていただいていた。2017年度には三春でこれまで最大規模の編成で「動物の謝肉祭」を実施。「地域を元気にする」ことを目指し、子どもを通じて地域を支援すること、そのためには子どもたちと近い距離でコミュニケーションを取りたい思いから、弦楽四重奏でアウトリーチを実施。三春町立御木沢小学校、葛尾小中学校、富岡小中学校の児童生徒、そして三春交流館にて三春町内の小学生に参加型のコンサートを開催した。</p>		
目的	<p>① 交流の場の創出(三春町立御木沢小とその近くにある富岡小三春分校の児童生徒など)</p> <p>② 質の高いクラシック音楽の演奏に触れる機会の提供と、目の前で楽器の紹介や参加型要素を取り入れることによって身近に感じてもらう関心を持ってもらうこと。</p> <p>③ 避難解除区域の小中学校の再開に伴い、避難先から帰還する子ども、避難先のままの子ども、家は避難先のままでもとの学校へ通う子どもなど多様化している。こうした環境が多岐に渡る子どもへの支援を通じて故郷の再生を目指す地域住民を音楽で励ます。</p>		
構成	<p>4つの各会場から希望を伺った。一緒に歌う曲に関してはそれぞれの学校で子どもたちが歌い慣れている曲を選び、弦楽四重奏に編曲。普段なかなか触れる機会の少ない弦楽器の音の響きを知ってもらうため、各楽器の音がわかる楽器紹介や曲当てクイズ、指揮者体験など参加要素を盛り込んだ約60分のコンサートを構成した。</p> <p>① 導入曲 ② メンバーならびに楽器紹介 ③ 一緒に歌おう(夢をかなえてドラえもん、ピリープ、もみじ等) ④ 曲当てクイズ ⑤ 指揮者体験(富岡町学びの森、葛尾村小中学校、御木沢小学校) ⑥ クラシックの名曲 アンコール)</p>		

<p>成 果</p>	<p>今回の訪問がきっかけで学校間の交流が生まれた。三春町立御木沢小学校と富岡小中学校三春分校である。三春町立岩江小学校の遠藤校長先生の計らいで、富岡の三春分校の児童生徒も招いた合同コンサートとなった。指揮者体験では各校から代表者が参加して大いに盛り上がった。終演後には両校が向き合い挨拶し合うなど交流が生まれ、その後一部の体育の授業も合同で行うようになった。</p> <p>また各会場で参加型として一緒に歌うコーナーを設けた。どの会場でも子どもたちが力いっぱい歌う姿を、学校職員、施設職員、地域の大人が見て、その姿に胸を打たれたという。三春交流館「まほら」では、東京の有名アーティストの公演もしばしば開催されているものの、必ずしも希望する全ての家庭でチケットを購入できるわけではない。各々事情がある中で、学校事業としてプロの演奏を聴いてもらえたことが子どもを通じて地域への貢献に繋がっているのではないだろうか。</p> <p>施設職員の機転からホールの魅力を発見した会場もある。富岡町学びの森では、当初小ホールでの開催を予定していた。小ホール奥の扉を開けると目の前には木々が広がる野外堂があり、楽器を鳴らしてみるとコンサートホールのように非常に音響がよかった。当日の天候も良かったことから、急きよこの野外堂で実施することとなった。避難指示区域の期間に眠ったままだった施設を使うことによって職員、地域住民、また帰還した子どもたちに自分たちの町に素晴らしい施設があることを再認識するきっかけを作ることができたのではないだろうか。</p> <p>また、双相地区は現在進行形で変化しており、学校をとりまく子どもの生活環境は複雑化している。避難指定区域が解除され故郷に帰るか否か、非常に繊細で難しい判断に迫られることは、子どもはもちろんのこと大人も大変なストレスを抱える。避難指示解除された葛尾、富岡で学校が再開した今、避難先の分校、受入元、避難元という複雑な状況下で苦慮されているのは学校の先生方も同じであり、また教員として転勤もあることから各学校間の情報共有と心の繋がりが重要である。こうした中で、今回日本フィルの演奏を聴いてくださった学校の校長先生、また富岡教育委員会の方を招いた交流会を実施。互いの状況への思いやりから遠慮や気遣いといった場ではなく、第三者である我々を媒介としてぎっくばらんに話ができる場を作ることができたのは非常に有意義だった。</p>
<p>分 析 と 課 題</p>	<p>避難解除地域となった富岡町、葛尾村の小中学校が2018年4月に再開したことにより、避難先から元の学校に戻る子ども、避難先のままの子ども、また家は避難先でそこから元の学校へ通う子どもというように子どもを取り巻く生活環境は非常に複雑化している。このように各事情が異なる状況下において、直接コミュニケーションが取れる規模で全員で合唱したり、曲当てクイズゲームなどの参加型アウトリーチには、子どもたちへのプロの音楽に触れる機会の提供以上に、その地域のコミュニティ強化のきっかけになり得るのではないだろうか。コンサートを契機に三春町立御木沢小と富岡小中学校三春分校の交流の例から考えられる。</p> <p>また今回富岡町を初めて訪れ、震災発生後に強制避難区域となり、帰還した今なお小中学校にある弦楽器や管楽器に手を付けられず、眠ったままの状態であることを伺った。楽器を失ったことで、震災前は活発だった吹奏楽部が消滅してしまったという。子どもたちの思い出が詰まった楽器をどうにかできないかという先生の想いに対して何か応えられないか思慮する一方、一音楽団体として我々だけでは力が及ばないのも現状である。今後はこうした地域課題の理解を深め、伝えていく中で外部の協力者を得て、関心層、支援者を増やすことが一層求められると考える。地域に寄り添う姿勢を持ちながら、当事業を通じて情報発信し関心を高めていきたい。</p>

平成30年度日本フィル「被災地に音楽を」事業実施報告

事業名	被災地に音楽を in 南相馬	会場	①原町第一中学校 ②③ゆめはっと
時期	平成30年10月6日(土)～10月8日(月祝) ①クリニック:10月6日 ②合同リハーサル:10月7日 ③コンサート:10月8日	対象	①②原町第一中学校吹奏楽部 ③一般来場者:598名
事業型	指導＋コンサート共演		
出演	齋藤政和(ヴァイオリン) 菅原光(コントラバス) 伊藤寛隆(クラリネット) 鈴木一志(ファゴット) 星野究(トランペット) 岸良開城(トロンボーン) 福島喜裕(パーカッション) 巖谷陽次郎(語り) 三枝木宏行(脚本)		
経緯	<p>福島県南相馬市は東日本大震災による津波被害に加え、市内の一部が福島第一原発から20キロ圏内の避難指示区域にあり、大変な困難と不安の時を過ごしてきた。この地域で活躍する名指導者・阿部夫妻の尽力によって全国レベルまで育て上げられた原町第一中学校(以下、原一中)吹奏楽部の活動も、原発事故により一時的に中断を余儀なくされ、部活に所属する生徒数も激減してしまった。</p> <p>吹奏楽部に残った生徒たちと先生の音楽へのひたむきな思いを受けて、日本フィルは毎年楽器指導を通じた支援を行ってきた。さらに、彼らの素晴らしい音楽を多くの人に聴いてもらうべく、杉並公会堂を中心に毎年開催されている「荻窪音楽祭」への招へいを行い、交流自治体である杉並区と南相馬市に音楽の橋をかけてきた。</p>		
目的	<p>震災から時が経過し吹奏楽部の人数も少しずつ戻り、活動にも活気が戻ってきた今、これまで応援してきた原一中とともに、南相馬市をもっと元気にしたい。また、これまで指導する側、受ける側という距離で接してきた子供たちと、同じ立場でコンサートに臨み、その横顔と背中から、音楽をする意味やそれが人に与える力をさらに深く感じ、人生のよりよき糧としてほしい。そうした思いから今年も、毎年10月に同校が市内のホール「ゆめはっと」で開催しているコンサートに日本フィルが出演し、ステージを共にすることとした。</p>		
構成	<p>10月6日(金)楽器クリニック 今回の演奏会で日本フィルと原一中が合同演奏に選んだホルスト作曲の組曲「惑星」より「火星」「木星」を、日本フィルのメンバーがパートに分かれて指導した。</p> <p>10月7日(土)合同演奏リハーサル 日本フィルのメンバーが吹奏楽部の生徒に加わり、鈴木先生の指揮のもとで演奏会に向けたリハーサルを行った。</p> <p>10月8日(日)原町第一中学校吹奏楽部コンサート ～日本フィルハーモニー交響楽団のアンサンブルを迎えて～ ストラヴィンスキー:兵士の物語(抜粋) 語り:巖谷陽次郎 台本:三枝木宏之 他 原町第一中学校、原町第三中学校、原町第二小学校、日本フィルハーモニー交響楽団 各団体の演奏に加え、合同演奏では原町第一中学校吹奏楽部とOB、日本フィルのメンバーがホルスト「惑星」より「火星」「木星」を演奏した。</p>		

<p>成 果</p>	<p>ホルスト作曲〈惑星〉はオーケストラ曲だが、優れた吹奏楽版があり、この難曲に取り組む中学生たちに、日本フィルのメンバーが丁寧な指導を行った。トランペット、トロンボーン、クラリネット、コントラバス、打楽器のメンバーがそれぞれ同属楽器を指導。特にコントラバスは普段なかなか指導を受けることができないが、今回は生徒が一人だったためしっかりと個人レッスンの時間を持つことができた。また、フルートおよびサクソフーンは、ヴァイオリンの齋藤政和が指導。楽器の枠にとらわれないオーケストラ奏者ならではの指導を受けて、生徒たちの演奏はどんどん変わっていった。</p> <p>今回の演奏会で合同演奏を指揮するのは、名指導者・阿部和代先生から今年指揮棒を受け継いだ、転任初年度の鈴木淳子先生。新しい学校という環境の中で、伝統ある吹奏楽部に対してどう取り組むか試行錯誤の日々で、初年度からこの大きな舞台を任されるのは大変なプレッシャーだった。また、日本フィルのメンバーたちは合同演奏の練習を通じて、指揮者に対して演奏者が受け身になるだけでなく、違う楽器同士がいかに響きを聞きあい、それぞれの役割を果たしつつお対外を理解していくことが重要であり、指揮者と演奏者の信頼関係も良い演奏に必要なことを伝えた。メンバーのオーケストラ奏者としての経験と音楽への思いがこもったアドバイスを受けて、生徒たちの演奏はどんどん良くなっていった。</p> <p>コンサートでは各校の演奏に続いて日本フィルがストラヴィンスキーが小編成アンサンブルのために作曲した〈兵士の物語〉を演奏。語りを担当してくださった巖谷さんの名演もあり、アマチュアでは演奏が困難な芸術性の高い楽曲に、会場全体が興奮に包まれた。</p> <p>その後の合同演奏では鈴木先生の指揮のもと大吹奏楽が荘厳なイギリス音楽を奏で、600名近くのお客様で埋まった会場が大歓声に包まれた。終演後にはロビーでささやかな交流会、写真撮影を行い、生徒、日本フィルメンバー、先生や関係者との穏やかな時間が流れた。</p>
<p>分 析 と 課 題</p>	<p>これまで原町第一中学校吹奏楽部への楽器指導を中心に支援を行ってきた当地域だが、果たして日本フィルの活動としてそれだけでよいのかという声もあった。また、対象の限られた活動であったため、地域全体のことを知る機会も少なかった。このコンサートへの参加を通じて、原町第一中学校この地域の吹奏楽でリーダー的な役割を果たしていることがよくわかった。そして音楽文化が地域に深く根差していることに深い感銘を受けた。各校の演奏はお世辞抜きで本当にひたむきで美しかった。</p> <p>今回一番驚いたのは、我々のみならず、この素晴らしい地域の音楽文化の価値を、一般市民、それどころか当事者や関係者たちも本当に理解していないということだ。原町第一中学校吹奏楽部の活動を外部で紹介することで彼らの活動を応援してきたが、原町の内部でこの活動の価値を理解してもらうことが大きな課題＝チャンスとして認識できたことは大きな気付きだった。このように「コミュニティ内外への情報の橋渡し役」として地域に関わっていくことは、今後オーケストラに開かれた可能性であると考えている。</p> <p>また、地域の人口減少、ことに震災の後の被災地域の子供の減少に伴い、文化活動の担い手の不足や、グループの活動の維持が困難になってきていることも分かってきた。活動自体の支援や活性化を目指すとともに、日本フィルはこうした被災地で起きている問題をより多くの方々に知ってもらうことで、社会全体に関心を持ってもらうことも重要だと考えている。</p>

2019年度日本フィル「被災地に音楽を」事業実施報告

事業名	東北『夢』プロジェクト2019 楽しいオーケストラ in 岩手	会場	岩手県民会館 大ホール
時期	令和元年8月11日(日)14時30分～17時30分	対象	盛岡市内外、岩手県外など 1200名程
事業型	オーケストラ・コンサート＋共演		
出演	出演：指揮：永峰大輔、お話とうた：江原陽子、バレエ：スターダンサーズ・バレエ団 第3部ゲスト：赤澤鎧剣舞(大船渡市立大船渡北小学校郷土芸能部部員)16名、 宮古高校吹奏楽部 56名		
経緯	<p>これまで日本フィルは沿岸部を中心に「被災地に音楽を」の活動を継続してきた。この8年で沿岸部と内陸都市部の復興への意識の差は広がるばかりで、沿岸部で沿岸部の方に対して行うことだけではなく、沿岸部の現状を広く知ってもらうために、初めて内陸の盛岡で「東北の夢プロジェクト」と題したオーケストラコンサートを開催する運びとなった。このコンサートは45年続く夏休みコンサートを土台とし、第三部にゲストコーナーを設け、沿岸から文化をもつ子どもたちを招いて共演するというものである。今回は、これまで関係性のある宮古高校吹奏楽部と、大船渡市民族芸能第一号に指定されている赤澤鎧剣舞を受け継ぐ大船渡北小学校郷土芸能部を招いた。</p> <p>また、応援バスツアーとして出演団体の地域の宮古と大船渡から、高齢者を中心にバスツアーを実施。沿岸から盛岡まではなかなか交通網が少ないため、希望があっても個人で盛岡に行くことは難しい高齢者を対象とした。</p>		
目的	<p>① 各地で芸術文化活動に励む子どもたちを地域内外の大人が応援する雰囲気をつくることで、東北地方沿岸の被災地コミュニティの活性化</p> <p>② この機会を通じて各地の文化活動の存在をより多くの方に知ってもらい、その地域に関心を持つきっかけづくりとする</p> <p>③ 子どもたちにも特別な経験をもたらす、達成感や幸福感、希望を感じてもらい、事業に関わる沿岸、内陸、県外の多くの方の交流の場を作り、情報共有と発信の機会とする</p>		
構成	<p>「楽しいオーケストラin岩手」</p> <p>第一部 オーケストラ・コンサート</p> <p>第二部 バレエ「シンデレラ」</p> <p>第三部 ゲストコーナー(大船渡北小学校郷土芸能部 赤澤鎧剣舞、宮古高校吹奏楽部)</p>		
成果	<p>オーケストラ、バレエ、そして沿岸部の吹奏楽と伝統芸能といった多様な演目がそれぞれの関心層に響き結果として相乗効果となったといえる。一般来場者ならびにバスツアー参加者、その他関係者を含めて約1200が来場し、来場者のほとんどが本事業の趣旨に深く賛同し、また来場したいという感想を持たれた。また、バスツアーに参加くださった高齢者。教育委員会担当者は業務ではなく個人的に参加くださり、終わった後には「もっと参加者を呼びたかった」といった声があった。こうした受益者から協力者へ転換するような「もっと何かしたい」と思ってもらえたことは一つの大きな成果なのではないだろうか。バスツアーの参加者から、災害公営住宅に移ってから初めて外(地域の外)へ出たという話が出た。バスツアー参加者と沿岸からの出演者を引き合わせるタイミングを作った。「ああ、だれだれさん！」といった声も聞かれた。このコンサートが何かの折に話のネタになるだけでもよいのではないだろうか。日本フィルのこれまでの活動の中で初めて有料として実施した。さらに事業実施にあたり、岩手県、岩手日報、IBC岩手放送が共催団体として事業実施上の業務負担を行い、岩手銀行や三菱UFJニコスが協力団体として広報面でのサポートを担った。また、宮古市、大船渡市の教育委員会は公演団体として、バスツアー参加者の募集やとりまとめを行うなど、各自自治体や地元企業と連携を図ることができたと言える。</p>		
分析 と 課題	<p>本事業の大きな特徴は、西洋由来のクラシック音楽、クラシックバレエと、日本の伝統芸能、そして各学校が部活動等を通じて育んでいる文化活動(吹奏楽や合唱団)という、複数のジャンルにわたる多彩な文化芸術が一堂に会することにある。当日のアンケート結果から聴衆の構成を見ても、オーケストラのファン、バレエのファン、伝統芸能を見に来た方、吹奏楽に関心がある方がバランスよく分布しており、それぞれのファンが違うジャンルと出会う機会として機能していることがわかる。</p> <p>出演者同志についても同様のことが起きており、伝統芸能関係者がオーケストラやバレエの実演に初めて接して感動して涙を流したり、プロのバレエ団が子供たちの演奏や演技に深く感動するという場面も作り出すことができた。こうしたさまざまな芸術活動の関係者が集い交流を進める器となり、地域全体の文化芸術活動の促進を図ることが、今後のオーケストラの大きな使命になると考える。</p>		

令和2年度日本フィル「被災地に音楽を」事業実施報告【中止(緊急事態宣言延長のため)】

事業名	10年目の訪問事業 被災地に音楽を in 石巻	会場	川の上・百俵館
時期	令和3年3月8日(月)14:00～15:10	対象	川の上地区の地域住民 30名程 (座席を50%以下で使用)
事業型	アウトリーチ+対話		
出演経緯	<p>ヴァイオリン 田村昭博 / 大貫聖子 ヴィオラ 中川裕美子 チェロ 久保公人</p> <p>今回訪問予定だった川の上地区は、宮城県石巻市の市街地から車で20分ほど北上し、北上川沿いに位置する。平成30年、防災集団移転により沿岸部から約400世帯が移り住み、内陸と沿岸それぞれの文化を持った方々が暮らしている地域である。住民同士は異なるバックグラウンドのため、新旧の住民が親睦を深める場が求められ、2015年に「川の上・百俵館」が開館。お年寄りも赤ちゃんも、地域の人たちが共に学びあい、支えあい、伝承するための地域の学び舎となっている。まるで図書館のような百俵館の施設は非常に心地よい空間であり、前回平成30年の訪問時には、百俵館から車で5分程にある二俣小学校の児童に川の上を思っ作ってもらった詩をコンサートの中で朗読してもらい、演奏を続ける取組みを行った。</p> <p>今回は出演者スタッフともPCR検査を受け、座席数を半分以下に減らし、近隣の方を招く予定であった。楽員とも検討し、少しでも元気な気持ちになってコンサートをあとにしてほしいという思いから、お年寄りに馴染みの深い曲や北海道民謡ソーラン節や宮城民謡さんさ時雨等を用意した。さらに、震災から10年を目前に控え、演奏後には聴いてくれたお客との率直な感想や意見交換を行うことも計画していた。</p> <p>だが、1月7日に発出された一都三県への緊急事態宣言が2度にわたって延長となり、公演日が緊急事態宣言下となってしまったため、開催数日前に実施を見送る決断となった。非常に残念ではあるが、3月末に新たに石巻市芸術文化センター(石巻市複合文化施設内)が開館し、さらに震災の記憶と教訓の後世への伝承、国内外に向けた復興に対する強い意志の発信を目的とする石巻南浜津波復興祈念公演も開園。石巻市はこれまで地域をはじめとする内外の方が幾重にも復興へ向けて尽力され、10年目を迎えた今、まさに未来へ向けてのシンボルとなるものが開かれた。施設は人が集い、使われてこそ可能性が発揮される。地元の音楽文化や団体の活動を尊重することを忘れずに、東京のオーケストラとして、また10年近く関わりを持たせていただいた団体として、継続してまいりたい。</p>		

令和3年度日本フィル「被災地に音楽を」事業実施報告No.1

事業名	東北の夢プロジェクト2021 in 岩手	会場	岩手県民会館 大ホール
時期	令和3年7月22日(木・祝)14:30開演	対象	盛岡市を中心に県内全域
事業型	オーケストラ・コンサート+ゲスト出演コーナー		
出演	出演:指揮:永峰大輔、お話とうた:江原陽子、バレエ:スターダンサーズ・バレエ団 第3部ゲスト:宮古高校吹奏楽部(57名)、 陸前高田市立気仙小学校けんか七夕太鼓(17名)		
経緯	<p>これまで日本フィルは沿岸部を中心に「被災地に音楽を」の活動を継続してきた。ハード面の復興が進む中で沿岸部と内陸都市部の復興への意識の差は広がるばかりだと聞き、沿岸部の方に対して行うことだけではなく、沿岸部の現状を広く知ってもらうために、2019年盛岡で「東北の夢プロジェクト」と題したオーケストラ・コンサートを開催した。このコンサートは45年以上続く夏休みコンサートを土台とし、第三部にゲストコーナーを設け、沿岸部で文化活動に励む子どもたちを招き、同じ舞台上で彼らの文化を披露いただくものである。</p> <p>2019年に開催した同公演は吹奏楽や伝統芸能を招いて、オーケストラやバレエといった多様な演目が相乗効果を生み出した。2020年はコロナ禍で残念ながら中止となってしまったが、東京国際フォーラムにて「1日だけの夏休みコンサート feat.東北の夢プロジェクト」と題し、岩手・福島の3団体からビデオメッセージと演奏映像の一部を上映し、コロナ禍でも可能な形で地域との関係継続に努めた。</p> <p>今回は満を持して、2017年から交流が続く宮古高校吹奏楽部、およそ900年前から伝わる伝統芸能「けんか七夕太鼓」を受け継ぐ陸前高田市立気仙小学校の児童が出演する東北の夢プロジェクト2022を実施した。</p>		
目的	<ol style="list-style-type: none"> 1 地域の子どもたちの夢と未来を応援することで、地域コミュニティの活性化。 2 沿岸部で文化活動に励む子どもたちを内陸都市部で開催するオーケストラ公演にゲスト出演者として招き、新たな文化発信と交流の場を作り出す。 3 子どもたちへの特別な経験を通じて達成感や希望を感じてもらい、事業に関わる沿岸、内陸等、多くの方との情報共有の機会を創出する。 		
構成	<p>「東北の夢プロジェクト2021 in 岩手」</p> <p>第1部 オーケストラ・コンサート</p> <p>第2部 バレエ《くるみ割り人形》(日本フィル 夏休みコンサート2021年版)</p> <p>第3部 ゲストコーナー(陸前高田市立気仙小学校けんか七夕太鼓、岩手県立宮古高校吹奏楽部)</p> <p>第4部 みんなで楽しく体を動かそう!</p>		
成果	<p>徹底した感染対策を施した上での実施には、ゲスト団体の理解を得られなければ不可能だった。吹奏楽や伝統芸能は、同じ文化活動でもオーケストラとは練習含めた演奏形態が異なる。感染対策上の安全面から、普段とは異なる形で披露いただくことに対して検討を重ねてきたが、その度にゲスト団体の意欲を感じ入ることができた。実際その舞台は堂々としたものであり、オーケストラの楽員も舞台袖のモニターから様子を見守っていた。</p> <p>岩手県は長らく新規感染者数ゼロが続いた唯一の県であり、独自の対策を講じている。困難な状況の中、県内の関係者との協力体制を一層構築し、公演当日に至るまで細やかに連携を図ることができた。制約のある中で、いかに関係性を繋げていけるかが試されたようにも感じる。共催団体として岩手県、岩手日報社、IBC岩手放送に協力いただき、岩手銀行には広報面のサポートをいただいた。また、2020年のメッセージ映像を撮影いただいた宮古市在住のプロのカメラマンに当日の記録写真を担当いただくなど、回を重ねることで初年度より現地の方の関わり方が多面的になってきたと言える。</p>		
分析 と 課題	<p>本事業の大きな特徴の一つは、西洋由来のクラシック音楽、バレエ、そして各学校が育てている文化活動(吹奏楽や伝統芸能)という複数のジャンルにわたる多彩な文化芸術が一堂に会すること、それを通じた参加者や関係者の交流の場が培われることにある。</p> <p>今後も継続するにあたり、ゲスト団体の選出方法やこれまで関わってきた沿岸部の団体との関係継続の方法などを今一度見つめ直す段階にきている。東日本大震災から11年が経ち、直接震災を経験していない世代が育つ年月が経った。この事業を通じて伝えていきたいことは何なのか改めて問い直し、そして日本フィルが主役なのではなくあくまで地域の子どもたちやコミュニティに一層のスポットが当たるような仕組みを作っていきたい。</p>		

令和3年度日本フィル「被災地に音楽を」事業実施報告No.2 【中止】

事業名	東北の夢プロジェクト2021 in 福島	会場	とうほう・みんなの文化センター 大ホール
時期	令和3年8月21日(土) 15:00開演	対象	福島市を中心に県内全域
事業型	オーケストラ・コンサート+ゲスト出演コーナー		
出演	出演:指揮:永峰大輔、お話とうた:江原陽子、バレエ:スターダンサーズ・バレエ団 ゲスト出演:南相馬市立原町第一中学校吹奏楽部、FTVジュニアオーケストラ		
経緯	<p>東日本大震災後、福島県内では毎年室内楽コンサートやクリニックを中心に、避難所となった学校や復興住宅等に音楽を届けてきた。中でも、南相馬市立原町第一中学校吹奏楽部に対しては、転出が相次ぎ部の存続が危ぶまれるという声を聞き、毎年クリニックや音楽ワークショップを実施してきた。その繋がりから、同校吹奏楽部定期演奏会に日本フィルの賛助出演や、30年以上にわたって続き日本フィルも出演する「荻窪音楽祭」に招聘するなど関係を構築してきた。</p> <p>また、沿岸から避難されてきた方を受け入れてきた三春町にも2017年から2020年まで毎年音楽を届け、原発避難区域であった葛尾村や富岡町にはそれぞれ2017、2018年より訪問を開始。そのような関わりから、岩手県同様に東北の夢プロジェクトへと発展した。</p> <p>2019年度の東北の夢プロジェクトin岩手に続き、2020年度は岩手に加えて福島市のとうほう・みんなの文化センターでも実施を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い両公演とも中止に見舞われた。2020年は1日だけの夏休みコンサート feat.東北の夢プロジェクトとして、東京国際フォーラムにて原町第一中学校吹奏楽部が映像出演。</p> <p>2021年は開催を目前に控えたなか、8月に入り福島県内の急速な感染拡大の影響によってゲスト団体の出演が困難となったため、非常に残念ながら2年連続の中止となってしまった。現地でチケット販売や運営を担っている福島民報社やゲスト団体と何度も検討し、相談のうえ決定した。次年度こそ実現に向けて、引き続き関係者と協力していきたい。</p>		
目的	<ol style="list-style-type: none"> 1 地域の子どもたちの夢と未来を応援することで、地域コミュニティの活性化。 2 沿岸部で文化活動に励む子どもたちを内陸都市部で開催するオーケストラ公演にゲスト出演者として招き、新たな文化発信と交流の場を作り出す。 3 子どもたちへの特別な経験を通じて達成感や希望を感じてもらい、事業に関わる沿岸、内陸等、多くの方との情報共有の機会を創出する。 		
構成	<p>「東北の夢プロジェクト2021 in 福島」</p> <p>第1部 オーケストラ・コンサート</p> <p>第2部 バレエ《くるみ割り人形》(日本フィル 夏休みコンサート2021年版)</p> <p>第3部 ゲストコーナー(南相馬市立原町第一中学校吹奏楽部、FTVジュニアオーケストラ)</p> <p>第4部 みんなで楽しく体を動かそう!</p>		